

甘檜丘東麓遺跡の調査

— 第146次

1 はじめに

甘檜丘は奈良県高市郡明日香村に所在する丘陵である。現在は大半が国営飛鳥歴史公園として整備されている。『日本書紀』によれば、7世紀中頃には蘇我蝦夷・入鹿親子が「上の宮門」・「谷の宮門」と称される邸宅を構えていた。

調査地は丘の周囲に入り込む谷地の一つに位置する。谷地は約6000㎡の面積で、北西から南東にむかって緩やかに傾斜しており、近年までは果樹園が営まれていた。これまで、この谷地では計4度の調査が実施されている。谷の出口では、第75-2次調査（『藤原概報25』）で7世紀後葉から藤原宮期にかけての2度の大規模な整地と、7世紀中頃の焼土層を確認した。焼土層からは、大量の焼けた土器とともに焼けた壁土や炭化木材が出土し、「乙巳の変」で滅亡した蘇我氏の邸宅に関わる可能性が指摘された。また、第141次調査（『紀要2006』）では谷の西奥で7世紀代の大規模な整地と掘立柱建物6棟・堀3条を確認し、この場所が蘇我氏の邸宅の候補地のひとつとして注目を集めた。

こうした成果をうけて、本年度は、谷地における遺構の広がりや性格の解明を目的に、谷の東奥に調査区を設定した。調査面積は916㎡、調査は2006年10月4日に開始し、2007年3月14日に終了した。

2 基本層序

調査区の位置する谷地は、東南下がりの緩い傾斜地で、各層もそれに従って傾斜する。基本層序は、上から腐植土混じりの表土（厚さ5～80cm）、造成土（厚さ5～120cm）、耕作土（厚さ10～85cm）、遺物包含層（厚さ10～40cm）、7世紀代の整地土もしくは地山となり、調整区中央部には古墳時代の堆積層がある。

整地土は、調査区の中央に入る北西方向の谷筋部を中心に積まれており、大きく7世紀末頃、7世紀中頃、7世紀前半の3期に区分できる。7世紀末頃の整地土（厚さ15～55cm）は褐色の砂質土で、土器・炭片・人頭大の石を多く含む。7世紀中頃の整地土（厚さ10～80cm）は黄褐

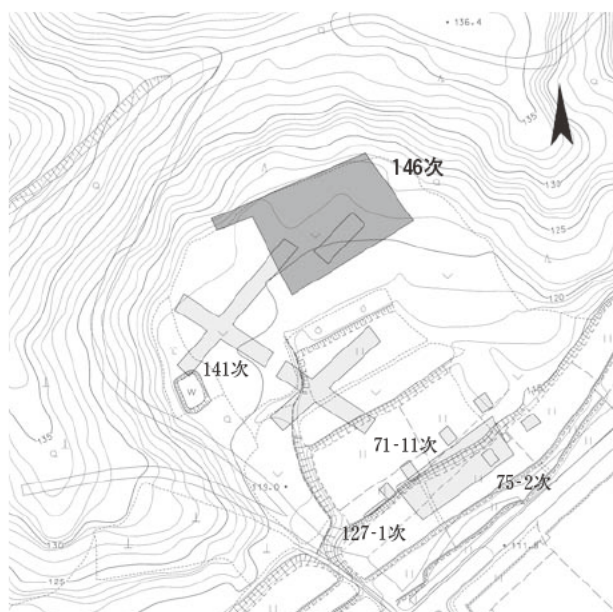


図121 第146次調査位置図 1:2000

色・褐色の粘質土を互層に積む。7世紀前半の整地土（厚さ5～80cm）は中頃の整地土とよく似た特徴を示し、黄色・黒色の粘質土を互層に積む。遺構検出面の標高は、7世紀末頃の遺構が約118.00～120.70m、7世紀中頃の遺構が約117.80～120.00m、7世紀前半の遺構が約117.40～119.20mであった。

3 検出遺構

検出した遺構の年代は7世紀前半（Ⅰ期）、7世紀中頃～後半（Ⅱ期）、7世紀末頃（Ⅲ期）に分けられる。以下、主な遺構について時期別に述べる。

Ⅰ 期

調査区中央の谷筋の東半に盛土をして一段高い平坦地を造成する。段差の部分には南北方向の石垣を築く。
石垣SX100 調査区の中央から南東方向に約15mの長さになわって確認した。南端は調査区外に延びる。石垣の軸線は、北で西に約30～40°ふれる。石垣の現存高は約50～100cm。南にいくにつれて高さを増す。石垣上部は失われているが、下部の数段が当初の位置を保つ。北側が人頭大の石を用いるのに対し、南側は一回り大きな石を使用する。石垣の法面の傾斜は、北側で約73°。南側は傾斜が緩くなっているように見えるが、これは石垣造成後Ⅱ期の整地の際に上方の石が崩落したことによるものであろう。南寄りには、東から延びる溝SD103の排水口が開く。石垣は裏込石を用いず、石垣裏には整地土が瓦層状に堆積している。整地土の積み上げと並行して石垣が造成されたことがわかる。

建物SB105 調査区の東隅部で検出した掘立柱建物。桁

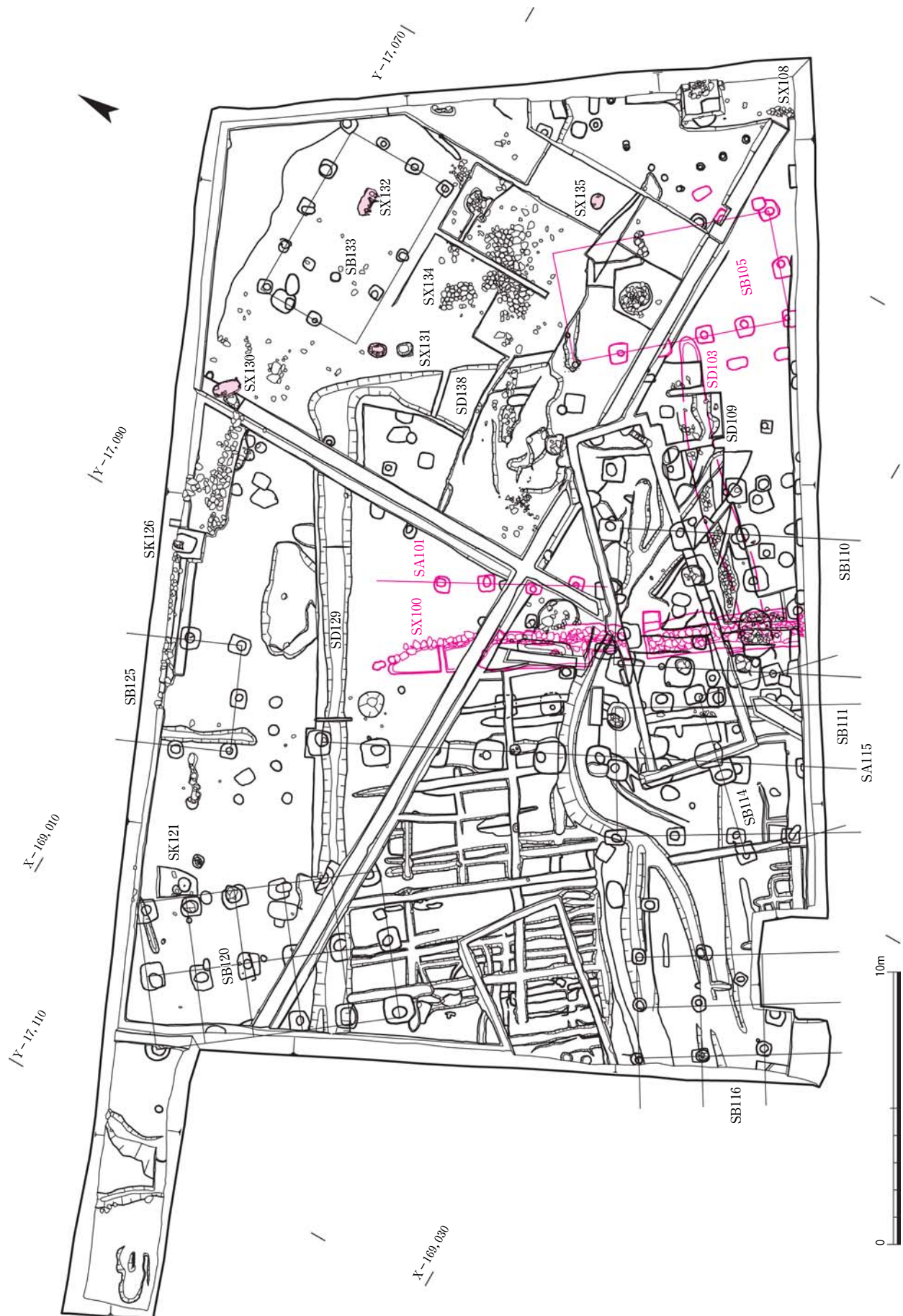


図122 第146次調査遺構図 1 : 200

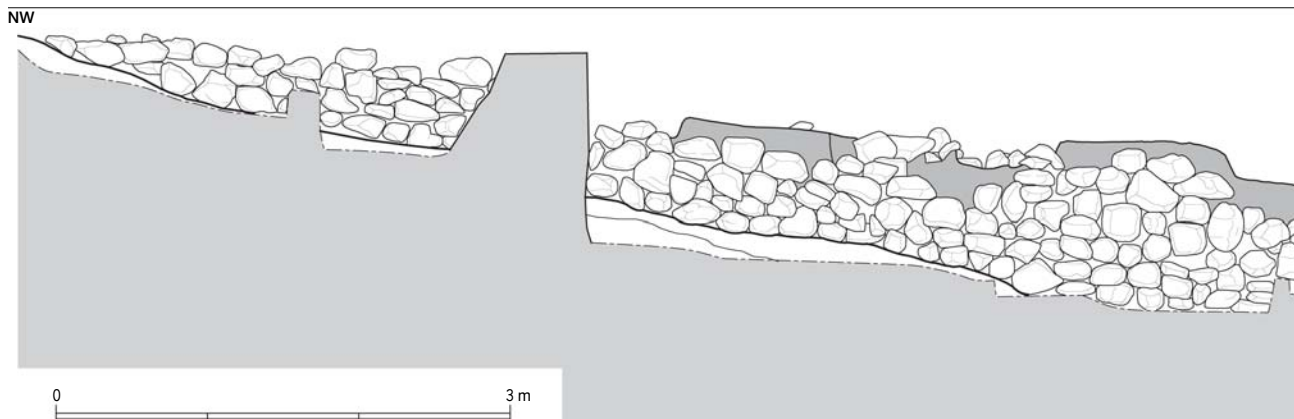


図123 石垣SX100立面図 1:50

行5間×梁行2間で、柱間は桁行1.6m、梁行1.9m。北で西に41°ふれる。南と西の側柱筋と東側1間分の柱穴を平面検出した。北妻中央の柱は、Ⅱ期の整地土を残したため平面検出はできなかったが、整地土の断面で柱穴の一部を確認し、桁行が確定した。柱掘形は一辺が85cmで、深さは約60cm。柱径は約20cmと推定できる。

塀SA101 石垣の東側の掘立柱塀。3間分を確認した。柱間は1.6m、北で西に30°ふれる。柱掘形は一辺が70cmで、深さは約40cmが残る。柱穴の抜取底面と石垣上端の標高差から、柱下部は約60cm以上が地中に埋まっていたと推定できる。柱径は約10cmとみられ、簡素な構造の塀だったと思われる。

溝SD103 建物SB105から石垣へと延びる溝。整地土上では幅約1.2m、深さは20cmだが、石垣法面では深さ約50cmであり、埋土が3層に分かれる。最下層は中央がグラ

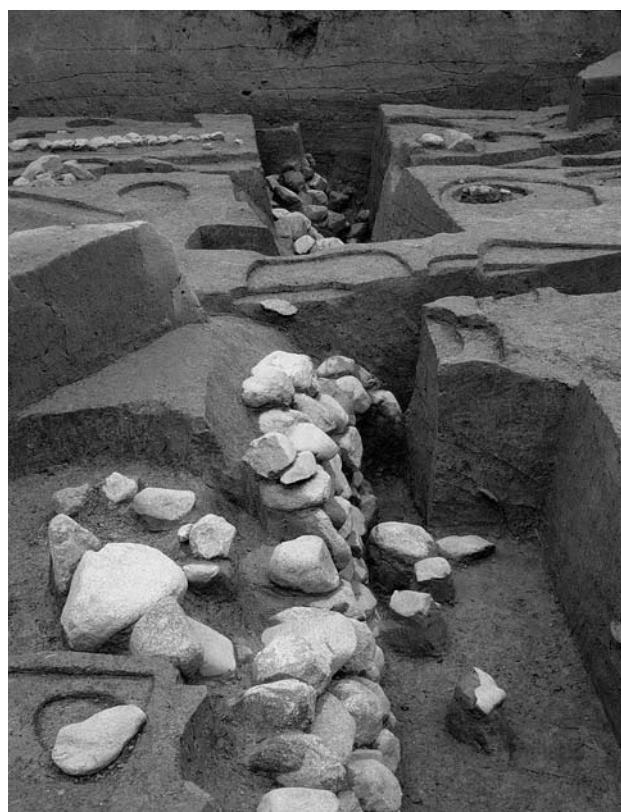


図124 石垣SX100 (北西から)

イ化した黄灰色、最上層は幅約85cmの砂溝で、土師器の高杯が出土した。石垣東の平坦地の排水路であり、Ⅱ期の整地直前まで機能していたものとみられる。

Ⅱ 期

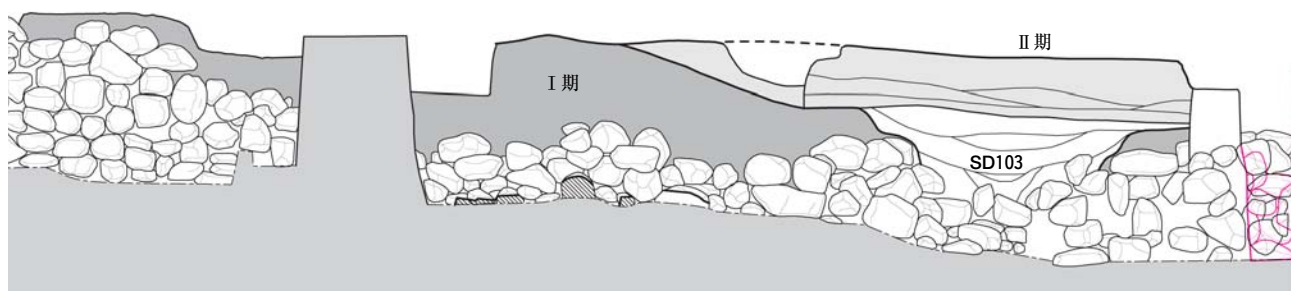
Ⅰ期の石垣を覆うように全面に盛土をし、段差をなくして平坦な敷地をつくる。整地土には焼土や炭片を多く含み、部分的な集中も確認できた。Ⅱ期には中小規模の掘立柱建物を建て、石敷や石組溝を設けた。建物には建て替えがみとめられ、Ⅱ期の中でも数度の変遷がある。

総柱建物SB120 調査区西隅付近で検出した掘立柱の総柱建物。桁行5間×梁行2間。柱間は梁行2.7m、桁行1.8m。北で西に約35°ふれる。柱掘形は一辺が約80～90cm。北隅の柱掘形は、深さ約80cmが残り、抜取は底が掘形底よりも約10cm深く食い込んでいた。柱径は約20cmとみられる。東隅の柱は北隅に比べて掘形底面の標高が約40cm低い。整地上面の傾斜にあわせて、掘形をより深くしたものと思われる。切妻造の高床建物が復原でき、倉庫だった可能性もある。『日本書紀』には蘇我氏の邸宅に「兵器庫」があったと伝えるが、調査区内からは武器などの遺物は出土していない。柱穴と整地土の層位関係からⅠ期に遡る可能性もある。

建物SB125 調査区北西辺中央で検出した掘立柱建物。桁行不明、梁行2間以上。柱間は1.8m等間。北で西に約25°ふれる。北側は調査区外に延びる。柱掘形は一辺約50～80cm。西隅の柱の掘形は、深さ約35cmが残る。柱径は約10cmとみられる。

総柱建物SB116 調査区南隅付近で検出した掘立柱の総柱建物。桁行2間以上×梁行2間以上で、西側柱と南側柱は調査区外に延びる。柱間は南北方向が2.3m、東西方向が1.8m。北で西に約30°ふれる。付近は後世の棚田造成時に大きく削平されている。掘形は一辺約50～60cm。東側柱の掘形は底部の深約25～30cmが残る。一部の柱穴には抜取穴の中に石が入っていた。柱径は約15cmとみられる。倉庫などの小規模な高床建物の可能性もある。

建物SB110 調査区中央南側で検出した掘立柱建物。桁



行3間以上×梁行2間。南妻柱は調査区外に位置する。柱間は桁行2.3m、梁行2.5m。北で西に約30°ふれる。掘形は一辺約90～100cm、深さは80cmで、柱径は約30cmとみられる。

建物SB111 調査区南側で検出した掘立柱建物。桁行3間以上×梁行2間。南妻柱は調査区外に位置する。柱間は桁行2.1m、梁行2.3m。北で西に約30°ふれる。掘形は一辺が約70～80cmで、深さは約55cmが残る。柱径は、約15～20cmとみられる。

建物SB114 SB111の南半とほぼ同位置で検出した掘立柱建物。桁行2間以上×梁行2間。南妻面は調査区外に位置する。柱間は桁行2.8m、梁行3.0m。北で西に約45°ふれる。柱掘形は一辺約70～90cmで、深さは約65～75cmが残存する。柱径は15～20cmとみられる。北妻中央の柱は抜取底に礎盤らしき石が残っていた。

塀SA115 調査区西半で南北方向に8間分を確認した。柱間は北側が約2.0m等間だが、南3間分は約2.5mと広い。北で西に約30°ふれる。柱掘形は一辺が約1.2m、深さは約45～55cmが残る。柱径は約25cmとみられる。掘形底面の標高は北端から2基目が約118.35m、南端から2基目が約117.40mで、整地土上面の傾斜にそって塀の棟木も傾斜していたと思われる。柱間が大きくなる南3間分の東側には、SB110が塀と軸をそろえて建っており、両者が共存していた可能性もある。

以上、建物SB111と建物SB114、塀SA115の柱穴には切合関係があり、SA115、SB114、SB111の順に古い。

石敷SX134 調査区東北部で確認した石敷遺構。上下2段の雛段状に人頭大の扁平な石を敷きつめ、段差の見付けには扁平な石の面をそろえて並べる。石の周囲には据付掘形がなく、整地時に盛土しながら石を敷いたものとみられる。縁辺部は石が部分的に剥がされており、当初はより広い範囲に敷かれていたと思われる。石敷の下層には天武朝期の土器を含む東西溝がある。石敷は炭を含む褐色のⅢ期整地土で覆われていた。調査区東隅には同様の土で覆われる石敷SX108があり、一連の遺構だった

可能性もある。

石組溝SD109 調査区南側で、北東から南西方向に帯状に延びる石敷を長さ約8m分検出した。石敷の両端には側石の抜取らしき溝が部分的に確認できることから、この石敷は石組溝の底石と判断できる。

Ⅲ 期

調査区全面に盛土をし、東側の高い部分には炉をつくる。西側には炉より低い位置にL字形に溝を掘る。

炉SX130・132 炉SX130は調査区中央北端で確認した。隅丸長方形の平面で、長辺が1.1m、短辺が0.6m。底の全面に厚さ5cmの炭層が広がる。長径25cmの筒状の送風口が西南の長辺側に1ヶ所ある。轆の羽口の取り付け部とみられるが、通常の轆に比べ径がやや大きく、2本を挿入したものか。炉の内部には土器片が散乱している。炉SX132は調査区東北部で確認した。底部付近のみ残存。



図125 石敷SX134 (北から)

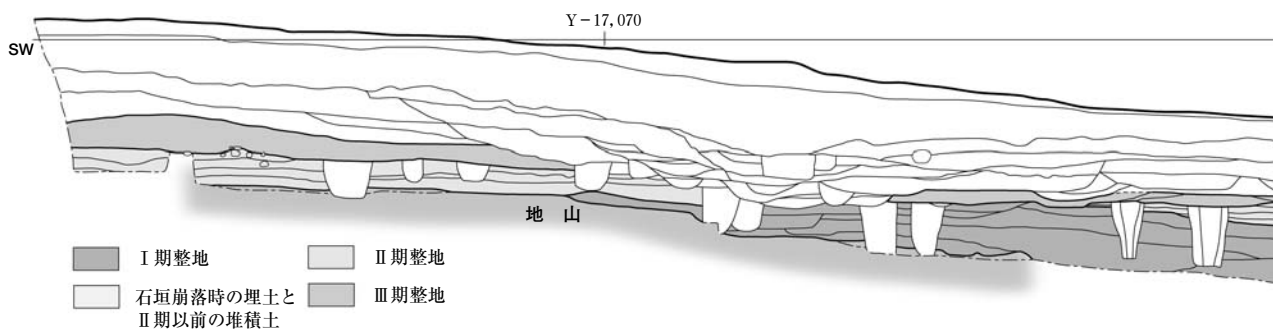


図126 調査区北東壁断面図 1 : 100

平面が隅丸長方形で、長辺1.1m、短辺0.6m。鞆の羽口をとりつけた送風口が南の長辺側に2ヶ所ある。底の全面には炭層が広がる。炉の周囲には建物SB133が建つ。炉SX130・132ともに、主軸は等高線に平行する。

炉SX130・132の用途は鍛冶炉、精錬炉の可能性が考

えられるが、いずれも炉壁の焼け方が弱く、炉の周囲からは鍛冶関連の遺物も見つからなかった。内部に土器が散乱していることから、土器焼成窯の可能性もあるが、類例はない。また炭焼窯としての類例も乏しく、用途については今後の検討課題である。

炉SX131・135 調査区東側と溝SD129の東で検出。いずれも平面が円形で径50cmが残存する。底面には炭層が広がる。炉SX131は北側に炭溜り土坑があり、炉内部の炭を掻きだしたとみられる。鍛冶炉の可能性はある。

建物SB133 炉SX132を囲む掘立柱建物。主軸は方位にのっており、II期までの遺構が地形に従う配置をとるのは好対照をなしている。桁行4間×梁間3間。柱間は桁行が1.6m、梁間が1.4m。斜面にあるため南側の柱列は削平されており、残りが悪い。掘形は一辺約40~60cmで、最も残りがよい柱穴で深さ約40cmが残存する。炉SX132の覆屋とみられる。

溝SD129・138 調査区中央にL字形にのびる溝。幅約210cm、深さ約40~50cm。溝埋土には炭を含み、藤原宮期の土器が多量に出土した。

(西田紀子)

SK121 調査区西北部で検出した小土坑。長軸約50cm、短軸約40cmの不整楕円形を呈し、深さは検出面から約10cmである。内部に1個体の土師器鍋Bを4片に分割し、あたかも蓋をするように折り重ねて置く。土坑底には小石があったが、その他の遺物は確認できなかった。有機物を埋納していた可能性もあるが、判然とはしない。土器は口径35.8cm、器高は18.5cm。平底に近い丸底で、胴部の2カ所に把手をもち、口縁部は大きく外反する。外面は刷毛目調整で、底部に黒斑がある。7世紀前半頃のものであろう。

その他

SK126 調査区西北壁中央部で検出した土器埋納坑。南北方向に主軸をとり、掘形の全体は検出できなかったが、長軸80cm以上、短軸約70cmを測り、深さは検出面から約10cmである。内部に土師器甕C1個体を横位に埋納する。土坑は、藤原宮期の遺構面より上の遺物包含土層から掘り込む。土器は口径24.4cm、器高は33.9cm。胴部は卵形で、口縁部は強く外反する。8世紀の年代が与え

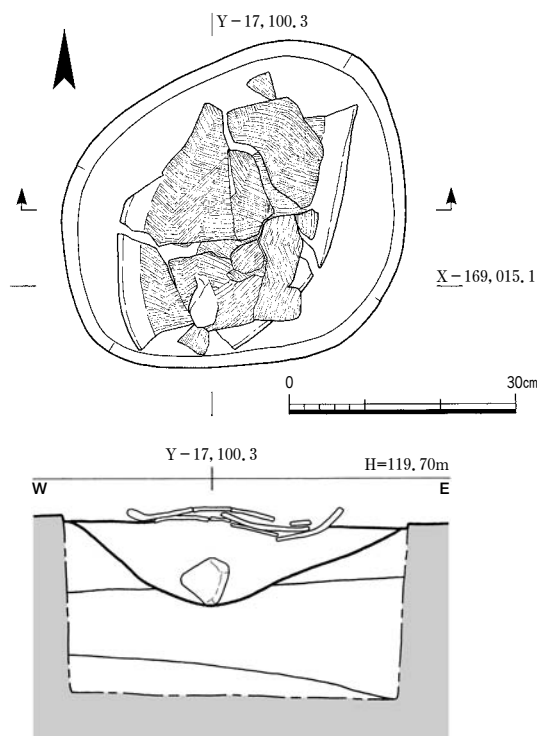


図127 SK121土器出土状況 1 : 10

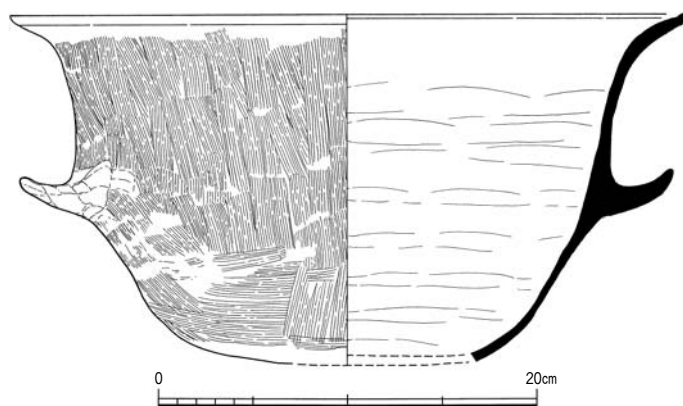
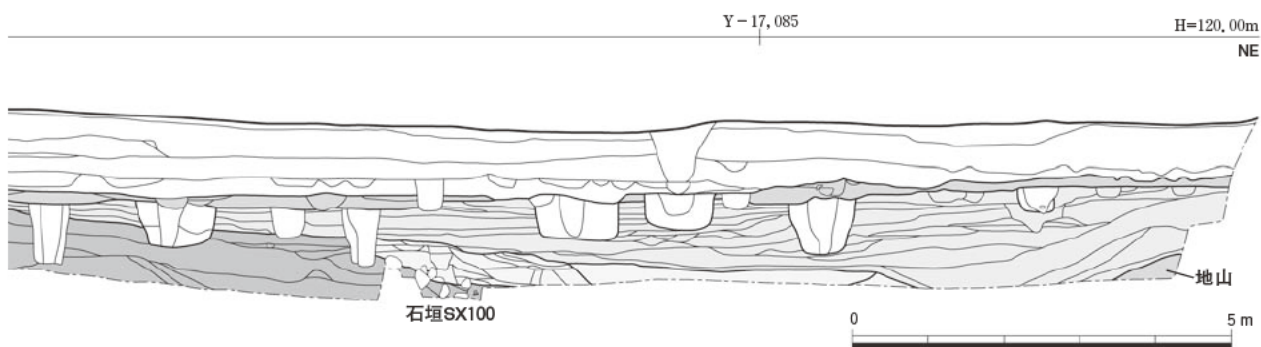


図128 SK121出土土器 1 : 4



られ、内部に骨等は残存していなかったが、他の類例からみて、小児を埋葬した土器棺と考えられる。第141次調査では奈良時代の土馬も出土しており、8世紀における当地の土地利用の変化をうかがわせる興味深い資料である。

4 出土遺物

土 器 調査区全域から、整理箱にして56箱分の土器が

出土した。大半が7世紀代の土師器、須恵器で、古墳時代と奈良時代～中世のものが少量ある。Ⅰ期整地土から出土した土器は僅少だが、Ⅱ期整地土に混在して飛鳥Ⅰの土器が多く出土している。Ⅱ期整地土出土土器の主体は飛鳥Ⅱ～飛鳥Ⅳで、Ⅲ期整地土は飛鳥Ⅴのものである。7世紀全般にかけて、漆の運搬具やパレットの漆工房に関連する土器が一定量みられ、注意される。(玉田芳英)

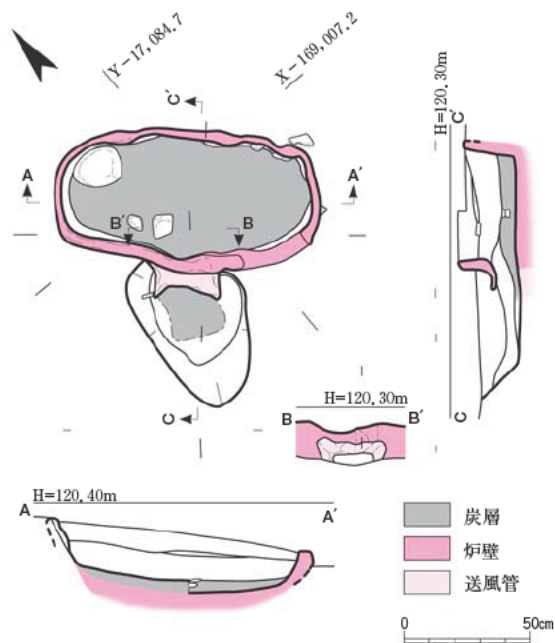


図129 炉SX132平面図・断面図 1 : 30

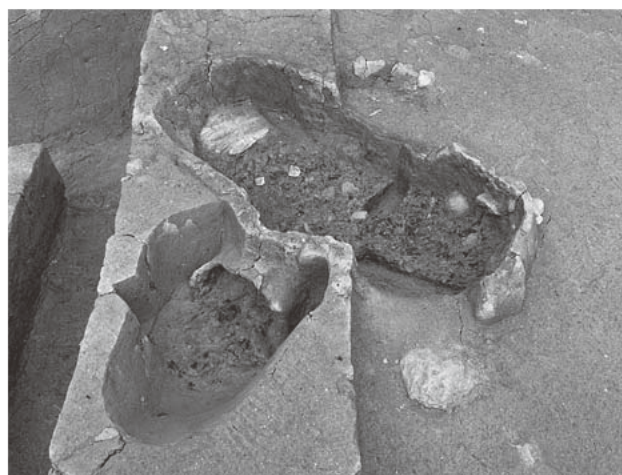


図130 炉SX132 (南東から)

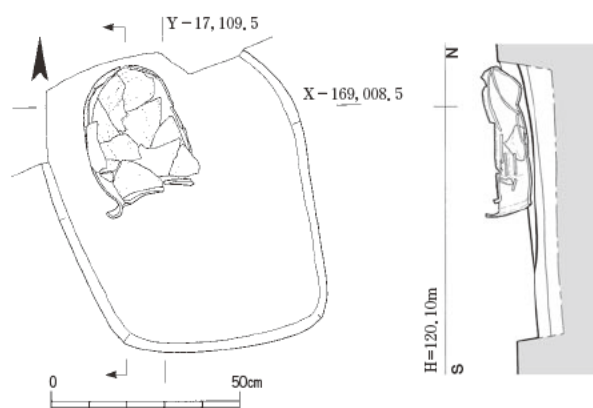


図131 SK126土器出土状況 1 : 20

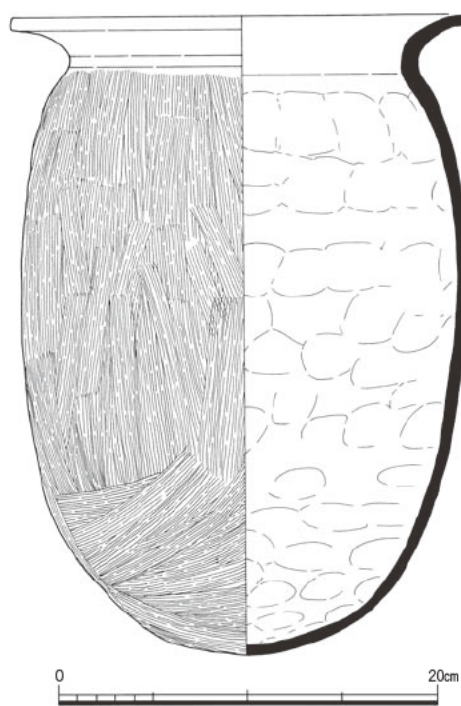


図132 SK126出土土器 1 : 4

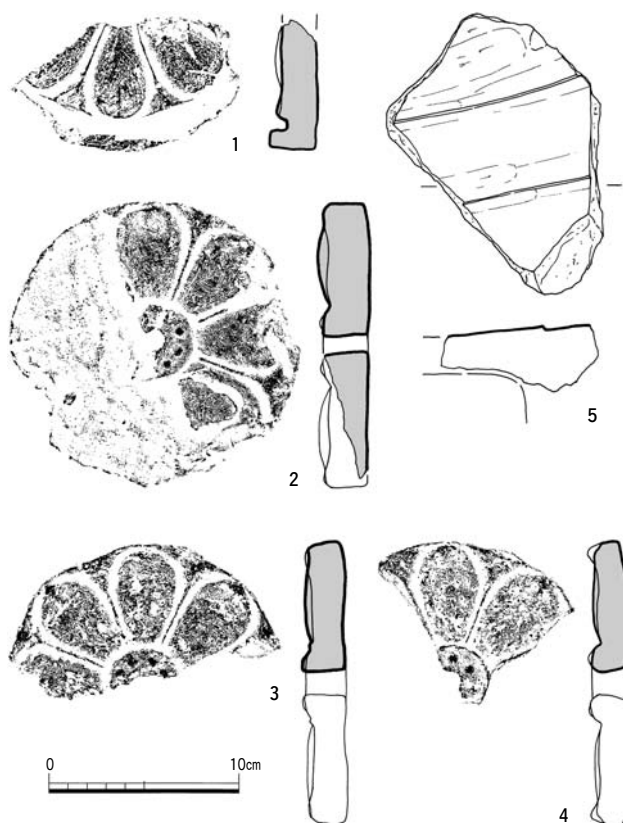


図133 第146次調査出土瓦 1 : 4

瓦埴類 軒丸瓦、道具瓦（垂木先瓦、鴟尾）、丸・平瓦、埴土管などが出土した。丸・平瓦の内訳は丸瓦（5.4kg）、平瓦（24.05kg）である。軒瓦は軒丸瓦1点、垂木先瓦1型式2種5点（いずれも船橋廃寺式）を確認した（図133）。

軒丸瓦1の蓮弁は緩やかに肥厚し、やや反転する弁端には輪郭線が入る。弁数は8弁。外縁は直立する。豊浦寺ⅢDと同範。表面が灰色、断面が暗青灰色を呈する。

垂木先瓦2・3の蓮弁は緩やかに肥厚し、やや反転する弁端には輪郭線が入る。弁数は8弁。中房は低い半球状で、間弁の対角線上に蓮子が配される。古宮遺跡出土の垂木先瓦A（小澤毅・西川雄大「飛鳥の船橋廃寺式および細弁蓮華文軒丸瓦」『古代瓦研究Ⅰ』奈良国立文化財研究所、2000年）と同範で、表面が白灰色、断面が灰黒色と色調や焼成の度合い（軟質）も似る。

垂木先瓦4も蓮弁が緩やかに肥厚し、わずかに反転する弁端には輪郭線が入る。弁数は8弁。中房は低い半球状で、中房の輪郭には圈線がめぐる。蓮弁の中心線上に蓮子が配される。瓦当文様は2・3と酷似するが、中房をめぐる圈線、蓮子配置の差異、4の弁幅がわずかに狭く弁端の反転も弱い点などから考えると、異範の可能性が高い。古宮遺跡出土垂木先瓦BやCとも一致しない。

他に船橋廃寺式垂木先瓦の小片が1点確認された。

鴟尾5は周縁と内面を欠失し、部位を把握しにくい。内面に腹部との接合部と考えられる箇所が残る、胴部右側面の破片と推定できる。

（高田貫太）

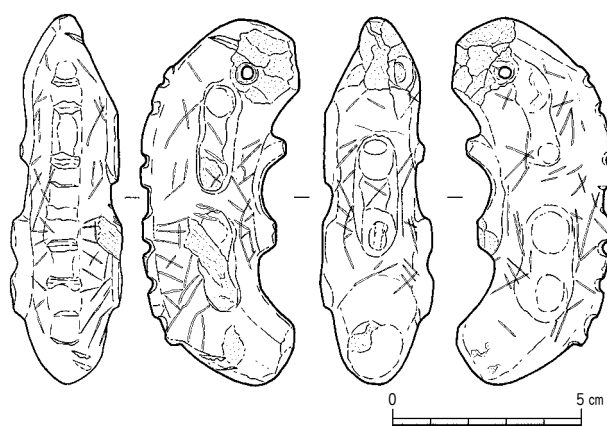


図134 第146次調査出土子持勾玉 1 : 2

その他 遺構および遺物包含層から、鉄製品、石製品、鑄造関係品などが出土した。鉄器は刀子2点、釘4点、板状品1点である。刀子はいずれも茎部の破片で、把の木質が付着している。釘はすべて破片で、残存長3.1～6.5cmを測る。石製品には子持勾玉（図134）、砥石の破片が1点ずつある。子持勾玉は排水溝からの出土。表面には線刻で文様を表現し、大平分類のB型2類に相当する（大平茂「子持勾玉年代考」『古文化談叢』第21集、九州古文化研究会、1989年）。断面比率が0.77、反りの比率が0.41で、大平の年代観によれば5世紀後葉のものである。鑄造関係品は羽口2点、鉄滓2点が出土した。いずれも整地土中からの出土。羽口のうち1点は先端部分が残る、口径が3.8cmを測る小型品である。この他、壁土の小片が1点、漆の漉し布が1点、少量の加工木と燃えさしが出土している。

（豊島直博）

5 まとめ

今回の調査では、7世紀代の3時期にわたる大規模な整地と建物などを検出した。特に、石垣を伴う7世紀前半の整地を確認したことは大きな成果である。この石垣は盛土法面の保護に加え、視覚的な効果も合わせもっていた。次いで7世紀中頃には石垣を覆って平坦地を造成。7世紀末には再び全面に整地をおこなう。いずれも多大な労力を投入した大工事であり、この地が7世紀を通じて活発に利用されたことが改めて明らかとなった。いずれかの工事に、蘇我氏が関与した可能性もあろう。

一方で、今回検出した建物は規模が小さく、焼けた痕跡も見られなかった。『日本書紀』によれば、蘇我氏は滅亡時に天皇記などを燃やしているが、邸宅が焼失したとの記事はない。今回の調査ではⅡ期、Ⅲ期の整地層に焼土や炭を含み、工房関係の遺構、遺物も出土している。焼土は工房に由来するものもあることが注意され、より広い視点から検討する必要がある。そのためにも、建物配置の全貌解明が課題といえる。

（西田）